
永遠を唄う姫

雪姫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

永遠を唄う姫

【Nコード】

N4250BA

【作者名】

雪姫

【あらすじ】

衝動的に始めてしまった輝夜憑依の小説、始めた以上どこで完結かわかりませんが投稿していきたいと思います。そんなにバンバン投稿はできないかな………

永遠の始まり

「にゃあああゝゝダメだゝゝ!!」

頭を抱え大声を出す一人の少女、彼女はどこにでもいる普通の女子高生である。

なぜ彼女がこのような大声を出しているのか、それは……

「ううゝどうしても輝夜クリアできないよ。」

その原因は彼女が今やっているゲームにあった。

――東方永夜抄――

同人ゲームとして世に出て、今では大変人気となった弾幕シューティングゲームの何作目かに当たるゲームである。

「友達には永琳のほうが難しいって聞いたけど……輝夜のほうが難しいと感ずるのは私がおかしいからなのかしら……」

友達の情報とは違うと考えこんでいる彼女だが、ここで彼女のことをに説明しよう。

彼女はパソコンから目を離さずゲームに没頭しているが何も彼女はゲーマーというわけではない。

運動は中の上で勉強も中の上、簡単に言えば普通より少しいろんなことができるということだ。

そして何より彼女は他の人には到底たどり着けない領域に到達したものを持っている。

それは家事スキルだ、彼女の家は世間一般で言えばかなり裕福な環境にある。父が政治家なこともあり小さい頃からあまり苦労はしなかった、故にお手伝いさん、つまりメイドだ。それが何人もいるほどに大きい家なのだ。

お手伝いさんがいるのになぜに家事がそんなにできるのだ？それは簡単だ。

彼女の母が貧しい家の出からである、単に裕福な暮らしが性に合わないとも言うのだろうか。そのせいもあつて彼女の母は家事を進んでお手伝いさんたちに混じってやっている。裕福な父に絶対に媚びない、そんな母の姿を彼女は小さい頃から見てきた、だから彼女の母は彼女にとって憧れなのだ、だから彼女も進んで家事を手伝ってきたことにより、超人的な家事スキルを手に入れたのだ。

裕福な父に媚びない、とは書いたが夫婦の仲が悪いわけではない。むしろお前ら朝っぱらからイチヤイチヤすんな砂糖吐くぞコラ！と声には出さないがそんなことを彼女が内心思っくらいにラブラブなのである。

家の環境がそういうこともあり、自身も女なことからあまりゲームといった類のものには関わってこなかった。だがそんな彼女に学校の友達が勧めてきたものがある、それが“東方”だ。

友達がやっているのを見て自身もやってみたところありえないくら

いにハマった、それから友達と一緒に東方について語り合うことも多くなったのだ、そんな彼女の今一番の楽しみは幻想万華鏡の最新作である。同人なのになにこのクオリティありえなくね？と友達と騒いだのは彼女のいい思い出だ。

さて、簡単に……………いや、けっこう長くなってしまったがこれで彼女の紹介は終わる。
では私の出番はこれで終わろう、次からは我らが主人公に変わる、
よろしく頼む。

??? side

どもども、東方大好きな女子高生よ。
突然だけど……………

「寝よう、疲れた……………」

えええええ？？と思つた読者諸君ごめんなさいね、私今すぐく眠いの。

だつてしょうがないでしょう？今は深夜2時、部活が終わり家に帰ってきたのが21時くらい。それからお風呂入ってご飯食べて明日の予習をしたら24時、それから何を血迷ったのか永夜抄をやつて……………という感じよ……………

「てか輝夜強すぎよ、全然クリアできないじゃない!!」
彼女は初見で輝夜まで行きました、いやそれだけですげえよ!!
by 作者

うん?今なんか誰かの魂の叫びみたいものが聞こえた気がしたけど
何だったのかしら……
まああまり気にならないということは気にしてもしょうがないとい
うことよね、うん気にしない。

「ふあああ……もう限界……寝ましょう。……でもその前に。
」

私はいつも寝る前にすることがある、それが髪の手入れだ。
私の髪は腰より下の方まであるくらいに長い、友達には癖毛もなく
てそんな艶々な黒髪が羨ましいなんてよく言われるけどこれを維持
するのがどれだけ大変か……

「よし、それじゃあ寝ようかな、おやすみなさい。」

数十分に渡って髪を手入れした後今度こそ私は眠りについた、次目
が覚めたとき非日常が待っていることも知らずに。

――少女就寝中――

「……………うん。」

外から小鳥のさえずりが聞こえる、障子を通して朝日が私の姿を照らす……………うん？障子？

「私の部屋は洋室……………なのになんで障子？てか……………何この部屋汚な—！」

私は目の前の光景に驚いた、だって昨日までの自分の部屋の面影はなく服やら何やらが散乱していて俗にいうニート？の部屋のような感じになっているからだ。間違いなくこの部屋をお母さんに見られたら殺される、現実世界に実現したOHANASHIをされてしま
う……………

「というか落ち着こう……………待てよ？私の今の状況をなんていうのだろう、まさかね……………」

ここでいきなりの暴露だが私は二次小説が好きだ、その中でも転生系憑依系は特に好きである。

見慣れない光景、先ほど気づいたが自身の髪がかなり長くなっている、普段の自分も相当長いほうだが今の自分はそれよりも長いと頭に伝わる重さでわかる。そして見るからに豪華なドレス。

「というより私のこのドレス……見たことあるんだけど……」

別段動揺はしないのだが嫌な予感というものが私の中で広がる。

そんな予感を押し殺して姿見に近づいていく、その鏡に映った自分の姿を見て嫌な予感が現実のものとなった。

「……………はあ……………」

鏡に映った自分の姿はどこからどう見ても東方の登場キャラクター、蓬萊山輝夜だった。

え？リアクションが少なすぎるだろうって？なら何とさえいいの？なんじゃこりゃ……って大声でも出してほしいのかしら。

「昔から周りに溶け込むのは得意だったけど……………ここまでだなんて自分を褒めたいわね。」

そんなことを言うが今の私は確かに動揺している、でもまずは……………

「片付けしましょう、いくらなんでも私にこの部屋は無理だわ。」

こうして私は部屋の片づけに取り掛かる、するとそこに可愛らしい

少女の声が聞こえてきた。

「姫様？もう起きられていますか？」

うん？誰だろうか、ここが永遠亭だとするならば考えられる人物は3人。

八意永琳、鈴仙・優曇華院・イナバ、因幡てゐの3人だ。考えても仕方がない。

「起きてるわ、入っていいわよ。」

「はい、失礼します。」

そこに入ってきたのは大きなウサギの耳（とても本物には見えない）を持ったブレザー服を着た少女だった。

「…………（やだ、生鈴仙すごく可愛いんだけど。）」

私はまじまじと鈴仙を見てしまう、そんな私の視線を不思議に思ったのか。

「？どうしたんですか姫様。」

首を傾げられ上目使いで聞いてくる……………何よこれ！抱きしめていいのかしら！！……………とまあそんなことよりも、鈴仙が来てくれたのなら丁度いい、片づけを手伝ってもらいましょう。

「丁度良かったわ鈴仙、今から部屋を片付けようと思っていたのよ。手伝ってちょうだい。」

こんな喋り方で大丈夫よね？てかこれ素んだけど不安になってきたわ。

「……………はっ？」

「えっ……………？」

いきなり口をポカーンと開けて固まる鈴仙、私何かした？

「姫様、もう一度仰ってください。」

「だから片付けをするから手伝ってほしいのよ。」

なんだ聞き取れていなかったただけなのね。

「……………はっ？」

「そのウサ耳引っこ抜くわよ？（黒笑）」

「すみませんでした~~~~~!!」

流石に私も二度目はうざかった、我慢できなかったわ。さっきの私の声は自分でも驚くくらいドスがきいてたと思う。

はぁ……………前途多難ね、元に戻る方法があればいいけど今はこの世界を満喫したいし……………まあ何とかなるでしょう。難しい事を考えるのは苦手だわ、精々楽しませてよね。

「姫様、手が止まっていますよ。」

「あらごめんなさい。」

締まらないわ……………

輝
夜

s
i
d
e

e
n
d

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4250ba/>

永遠を唄う姫

2012年1月11日10時47分発行